



カメラ探訪

文学のふるさと

その20 苓北町富岡



「南の風」 — 獅子 文六 —

「重助君、こっちにも、海があるぞ」六郎太は、驚きの声をあげた。先刻通ってきた、島原の内海が東に、青畳を敷いているが、西にもう一つの新しい海が、波濤を轟かしているのである。「これが、即ち、天草のナダじや」重助は、西側を指して、壮重な声を出した。

この「南の風」は新聞連載小説で、映画にもなり、天草ものなかでは一番よく知られている。

富岡の町は鳥のくちばしのように細く、幅の狭い半島の両側に、いまでも低い軒を並べている。そして大抵の人が波静かな巴湾と、怒濤逆まく天草灘の対象的な海の風景におどろかされる。



玉名郡天水町立小天東小学校 六年 森本 千菜美

金峰山の北西部、有明海に面したゆるやかな傾斜地に広がるみかんの産地、これが私達の住む郷土天水町です。私達の学校は、海拔一七五メートル、山の中腹にあり、周囲はすべてみかん畑です。安山岩の石垣をうまく利用して作った段々畑が、階段のようにどこまでも続いています。明るい日ざしと暖かい海風を受ける天水みかんは、甘くておいしいことで有名です。学校の近くに、皇太子殿下御夫妻がおいでになられた時の展望の地「霧ヶ丘」があります。ここからの眺めは格別で、遠く西に雲仙、有明海、天草の島々が絵のように美しく見えます。眼下には、天水、横島の干拓地が広がり、数百年前までは、海だったことがわかります。その干拓地には、ビニール畑が海のように見え、緑のじゆうたんや黄金の波に変化する稲作りのようすが手にとるように見えます。

この天水町は、その名前のように、水が美しく豊かで、良質の米の産地ともなっているのです。こんな美しいそして住みよい私達の町は昔から人々のいい住み家でもあったのでしょいか、いたる所に貝塚や古墳、その他貴重な遺跡が見られます。今では、町内全域、この山腹にまで水道の施設も出き上がり、りっぱな道路も通って便利になっています。昔から多くの人々が、こんなにみごとなみかんの里を作り上げるのにずいぶん苦労してきたと思います。

しかし、このようにすばらしいみかんの里にも心配なことが起こりはじめています。それは、全国的にみかんの生産が増加して、値段が下がることと、みかんちぎりのための人手が少なくなっていくことです、そのため父や母を含めて天水町の人々は品質のよいみかんを作り、高い値段でも売れるようにしようといっしょうけんめい努力しています。

私達も、この天水町を、よりいっそう住みよい町にするため、努力していきたいと思っています。